

小学校国語科の授業における対話から見えること

ー 児童の思考に着目して ー

学習開発分野(16220914) 加藤 直人

小学校では児童の話す力や聞く力についての課題が指摘されている。しかし、その指導については曖昧であることが多い。「主体的・対話的で深い学び」の重要性が示されている中で、児童の対話に着目する意義は大きい。本研究では、児童の思考状況の観点から対話の分析や「話すこと・聞くこと」の領域の教科書教材について検討を行った。授業における対話からは、児童の論理的思考が働いていることが明らかになった。また、対話に焦点を当てて授業づくりを行うことで、「話すこと・聞くこと」の領域の教科書教材を論理的思考の働くものにできる可能性が示唆された。

[キーワード] 話すこと・聞くこと, 対話, 論理的思考力

1 はじめに

(1) 問題の所在及び研究に至る背景

校内外における授業研究会や学校行事等についての反省職員会議等で、毎年のように、児童の話すことや聞くことに関する課題が指摘される。

「人前で、自分の考えを話すことができない」「話の内容をしっかりと理解することができない」「友だちの意見に対して自分の思いを伝えることができない」といった内容である。

このような指摘は、教師が児童の実態を踏まえて目標を設定し、日々の指導を行った上でのものであるとは限らない。教師によって、児童に求める到達度が異なり、評価も曖昧になる。しかし、話したり聞いたりする活動は、日々、行われていることであり、特に注目されることはない。

その結果、話したり聞いたりする学習活動に関わる指導が、児童の話す力や聞く力の向上につながらない現状がある。

中央教育審議会(2016)によれば、「主体的・対話的で深い学び」の重要性が指摘されている。また、対話の学習活動として、「子供同士や子供と教職員が、互いの知見や考えを伝えあったり、議論したり、協議したりすること」を挙げている。

対話は、相手の話を受けて思考しながら話す活動であり、日常生活を送る上で必要不可欠なものである。対話に着目し、児童の実態について明らかにすることは、話すことや聞くことの指導について考える際の有効な視点になる。対話について研究を進めることの意義は大きいと考える。

(2) 研究の目的

本研究では、以下の2つを目的とする。1つめは、授業における児童の対話についての思考状況を明らかにすることである。2つめは、「話すこと・聞くこと」の領域の教科書教材について、対話に焦点をあてた授業づくりが、可能であるかどうかについて探ることである。

(3) 研究の方法

野中(2016)らの先行研究に基づいて、児童の対話の思考状況について整理する。次に、教職専門実習Ⅱにおける国語の授業実践を通して、児童の対話の記録や学習プリントの記述等から分析していく。また「話すこと・聞くこと」の領域の教科書教材(三省堂、東京書籍)を用いて、対話の観点から検討する。

2 先行研究の検討

(1) 対話と論理的思考との関係性

寺井(2008)は、論理的思考力が強く働くのは、人間が「相手の思いを理解したい」という相手意識や「自分の考えをどうしても伝えたい」という目的意識などを持って、人と対話する時であると指摘している。

人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり理解したりする力を高めるためには、一人一人がどれだけ論理的思考力を働かせられるかにかかっていることも示している。

寺井は、児童が論理的思考の意識を高めていく

ための手立てとして、場面に応じて、どのような思考を用いるのかについて、具体的に指示することを含めた授業の工夫が必要であるとしている。

井上(2007)は、児童は授業の中で、児童なりに論理的思考を働かせながら対話していることについて、具体例を挙げながら指摘している。以下は、井上が示した例である。

学級活動の時間「集団登校の是非」について

A上級生だけなら、なにも列をつくって固まっていなくてもいいけど、1年生がいるときは危ないからなあ。

Bそうだ、1年生がいるときは集団登校して
いないときは、バラバラでいくことにしたらいい。

井上は、是か非かという二者択一的な考えではなく、「1年生がいるときは」という条件付きの賛成意見に注目し、論理的思考が働いているとしている。

また、井上は、論理がもともと私たちの日常使う言語の中に入っており、母語を習得していく中で自然に学んでいることについても示している。その上で「論理を使いながら対話していること」について、そのままにしておくのではなく、児童に自覚させたり、「自分の考えの筋道が正しいのか」を反省させたりすることが、より深まりのある対話を生むと述べている。児童に、論理的思考を用いた対話を身に付けさせるには、教師の役割が大きいことを指摘している。

(2) 授業における児童の対話の見方

野中(2016)は、論理的思考が働く場面として、「自分の考えを伝える時」と「相手の真意をとらえようとする時」であるとし、寺井と同様に、授業における児童の対話に着目することの重要性について指摘している。特に、課題解決に取り組むときの対話を通して、児童の論理的思考力が育つとし、対話を生む学習課題の設定の必要性についても示している。

また野中は、自分でどんな思考が働いたかを意識した時に論理的思考力が育つことにも触れている。自分の思考について振り返る場面を、授業に取り入れていくことの有効性についても述べている。

さらに野中は、自分でどんな思考が働いたのか

かを意識することを繰り返す中で、思考することへの価値を感じるようになり、別の場面での対話でも、思考を働かせようとするようになるとしている。

一方で野中は、授業における児童の対話を見る際の観点については、課題や問題に対する児童の考えとその根拠・理由を関連付ける際の思考であるとしている。野中は、様々な種類の思考を思考様式と呼び、例示している。その中の1つが以下の例である。

【野中が示す思考様式の例】

「白いぼうし」(光村4年上)の実践から

【課題】

「最後の一文『車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいが残っています』は、いるか。」

A「においまでわたしにとどけたかったのでしょう」って書いてあるから、夏みかんはおふくろの優しさだ。だから、いる。

B私は、「夏みかん」は「思い出」だと思う。

この二人のやりとりについて、野中は以下のように解説している。

Aが「夏みかん」を象徴としてとらえたことでBの発言が生まれた。Bは「私はAさんは、夏みかんは何かを象徴しているというとは同じだけれども、何を象徴しているのかは違う」という比較の思考がはたらいっている。

このように、野中は、児童の対話について注目し、児童の思考様式という観点から分析することの必要性について指摘している。

3 実践と結果及び考察

(1) 授業実践

以上の先行研究を踏まえて、教職専門実習Ⅱの機会を活用して、児童の対話に着目した国語の授業実践を行った。

① 対象 山形市内A小学校 6年生

② 単元名 『鳥獣戯画』を読む
(高畑勲著 光村図書)

③ 実践時間 7時間

毎時間、対話を通して解決できるような学習課題を設定して、児童の対話を思考に着目して観察

した。

次に示すのは、第2時の児童の対話の様子である。学習課題は「筆者はどのような意図で、この絵（挿絵）を選んだのだろう」と設定した。

事例1

A一番迫力があるからじゃないかな。
B全部の絵の中で一番ってこと？
A最後の絵は、お葬式みたいに見えるけど、全然動きがない。
B確かに。最初の絵もおにごっこをしているように見えるけど、相撲の動きには負けるね。
A動いているような絵だけど、何で選んだのかな。
B読者が楽しめるようにかな。
Aなるほどね。

BはAに対して「全部の絵の中で」という言葉で、理由や根拠について述べる際に、比較の思考をするように促していることがわかる。Aが答えた内容に対して、Bも比較の思考を行って、考えに対する根拠について話している。この他にも比較の思考を使って対話している児童が多かった。

次に示すのは、第5時の児童の対話の様子である。学習課題は「筆者の表現の工夫について考えよう。」である。

事例2

A136 ページの終わりって工夫してない？
B「野ウサギ。」っていうところ？
Aそうそう。「トノサマガエル。」も似た感じだね。
Bこういうの何て言うんだっけ？
習ったような気がするんだよね。
A思い出した。体言止めだ。
Bそうだ。そうだ。
他にもないかなあ。探してみようよ。
Aありそうだね。

AとBそれぞれが示した考えの共通性について二人で考えようとしている様子がうかがえた。帰納的思考を使いながら「体言止め」という表現の工夫を導き出すことができた。また、体言止めに当てはまる表現が他にないのかという演繹的思考にもつなげる様子が見られた。この時間は、叙述から、表現の工夫について考える学習である。し

たがって、帰納的思考を使いながら、理由や根拠について対話している児童の割合が高かった。

(2)対話を促す教科書教材

『小学校の国語5年』（三省堂）に、「写真と絵、どちらを選ぶ」という話すこと・聞くことの教材がある。日本茶の種類、おいしいお茶の入れ方についての事例が提示されている。これらのことについて、誰かに伝える際に、写真と絵のどちらがよいのかについて話し合う課題が設定されている。

この教材は、お互いの立場や意図をはっきりさせながら話し合うことが前提になる。また、立場をはっきりさせた上で、理由や根拠を示しながら自分の考えを伝えたり、相手の考えを理解したりすることを求めている。

友だちとの対話の際に重要になるのが、理由や根拠である。どのような思考をすることが、相手にわかりやすく伝えることにつながるのかを意識できる教材である。

授業では、児童が、それぞれの場合に照らし合わせながら、2つのうちのどちらかを選択して自分の立場を明確にすることになる。論理的思考の1つである「比較」という思考を意識させながら、対話が進められるような配慮をしていくことで、思考を働かせた対話が可能になると考えた。

また、『新しい国語3年下』（東京書籍）には、「グループで話し合おう」という教材がある。

この教材は、お楽しみ会の出し物について話し合って決める学習課題が設定されている。また、司会の進行に沿って話し合う活動が、初めてであることから、進め方について丁寧に記されている。さらに、実際に話し合っている様子についても紹介されていることから、児童が話し合いのイメージを持ちやすいような構成になっている。

その中に、みんなで話し合って1つに決める時に、重要になってくる思考について見て取れる箇所があった。一人一人の出し物の案の共通点を見つけて、それぞれが目指している方向性は一緒であることを確認する。その上で「みんながより楽しめるものは」という新たな視点を提示して、話し合いが進められているのである。

実際の話し合いでも、このような思考を使えばより話し合いがスムーズに進行できることを理解するには、大変有効な教材であると考えた。授業の際は、話し合いの様子について、丁寧に確認してから話し合い活動に進む必要がある。

4 到達点と課題

(1) 到達点

本研究では、国語科の授業において、児童の対話を思考状況に着目したことで、児童の中に「比較」や「帰納」、「演繹」等の論理的思考が働いていることが明らかになった。さらに、どのような学習課題を設定するのかによって、児童に働く論理的思考の違いも見えた。

「話すこと・聞くこと」の領域に関わる教科書教材について検討したところ、児童の対話に焦点を当てた授業づくりを行うことで、論理的思考の働くものにできる可能性が示唆された。

(2) 課題

児童の対話から明らかになった「論理的思考」について、日々の授業実践にどのように活かしていくのかを考えていくことが課題である。

まず、児童に対して、対話の中に「論理的思考」が働いていることを意識させるには、どのような手立てをとることができるかについて検討する必要がある。

また、実際に国語科の授業の中で対話を行う際に、「論理的思考」を用いることができるようにするための授業展開についても検討していくことが重要である。

5 おわりに

自らの授業実践を振り返ると、これまで国語科に限らず授業を進める際に児童にどのような思考が働いているかについて、注目することはなかった。

しかし、本研究を通して、児童の思考に着目しながら、授業中の対話について考えていくことの重要性を感じた。これは、児童の話す力や聞く力の向上につなげるためだけではないと考える。

日々の授業を構成する際の「学習課題」について検討したり、授業の中で、児童の考えを整理しながら深い学びに結び付けたりする上でも重要になるのではないだろうか。

対話というものは、授業中だけではなく、毎日の生活の中で、日々繰り返し行われている。すべての児童が今まで以上に自分の考えを伝えたり、相手の思いを理解したりすることができるようにするための具体的な方策について、これからも研究を進めていきたい。

引用文献

- 安彦忠彦(2008)『小学校学習指導要領の解説と展開国語編』, 教育出版, Pp. 116 - 117.
中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2016)「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf
最終閲覧日(平成 29 年 1 月 17 日)
井上尚美(2007)『思考力育成への方略 - メタ認知・自己学習・言語理論 - 』, 明治図書, Pp. 60 - 74.
野中太一(2016)『生きてはたらく論理的思考力』, 東洋館出版, Pp. 1 - 47.
三省堂(2015)『小学生の国語五年』, Pp. 164 - 165.
東京書籍(2016)『新編新しい国語三年下』, Pp. 36 - 41.

参考文献

- 青木伸生(2016)『筑波発読みの系統指導で読む力を育てる』, 筑波大学附属小学校国語研究部, 東洋館出版社,
堀裕嗣(2016)『国語科授業づくり 10 の原理 100 の言語技術 - 義務教育で培う国語学力』明治図書,
河野庸介(2008)『中学校新学習指導要領の展開国語科編』, 明治図書,
文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 国語科編』, 東洋館出版,
鳴島甫(2010)『高等学校新学習指導要領の展開国語科編』, 明治図書,
二瓶弘行(2015)『二瓶弘行国語教室からの提案 2 説明文の「自力読み」の力を獲得させよ』, 東洋館出版,
野口芳宏(2005)『鍛える国語教室シリーズ 12』, 明治図書
野口芳宏(2010)『国語授業のつくり方』, 東洋館出版,
野口芳宏(2011)『教師のための発問の作法』, 学陽書房,
多賀一郎(2015)『国語科授業づくりの深層』, 黎明書房,

An Analysis from the Dialogue of Japanese Language class in Elementary Schools: Focus on Thinking of Children
Naoto KATO